あなたと博物館

松本市立博物館ニュース No.169 2010.7.1

特別局 学都松本シリーズ3

学校の応から百景 が始まります

これが、たから! あれって、たから? ぼくの、わたしの、地域のたからものを学校のなかで再発見!新発見!!

母7月24日母 - 8月29日目

会場 松本市立博物館



開智小学校「三村寿八郎像」



本郷小学校「青い目の人形」



波田中学校「絆」

もくじ

誌上博物館 ◇「学校のたから百景」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	- 2-5
博物館ノートから◇工芸の五月アーカイブズ ・・・・	6-7
ガイドコーナーはんてんぼく	8



「学校のたから百景」

1学校のたからって?

みなさんは「学校のたから」と聞くと、どんなものを思い浮かべるでしょうか?「たからもの」と聞くと、きらびやかな宝石や高価な美術品などが浮かんでくると思いますが、「学校のたから」とは一体どんなものでしょうか?

学校にある素晴らしい絵画や工芸品は、もちろん 学校のたからでしょう。また、卒業生や地域の人々 から寄附された様々なものも学校のたからと言える でしょう。その他にも、学校で成長した児童・生徒 たちの思い出に残るものも、生徒たちから見た学校 のたからと言えるのではないでしょうか。学校がた からと考えるもの、生徒がたからと考えるもの、 地域の人がたからと考えるもの、これらはすべて学 校のたからといえると思います。このように学校の たからには様々なものがあるのです。

2博物館の始まりは学校から

現在、104年目をむかえる松本市立博物館ですが、 実はこの博物館、学校から生まれています。

博物館の前身、「明治三十七、八年戦役紀念館」は、明治39年(1906)9月21日、当時の松本尋常高等小学校で産声をあげています。これは、日露戦争に出征した同校の卒業生たちが母校に寄せた民族(民俗)資料や写真を保存するための時局資料保存室が手狭になり、新たに施設を設けて保管・供覧することになったことによります。この施設は館名のとおり当時の世相を色濃く反映しているものの、実物を学校教育に活用したことは注目に値します。開館時の資料は軍事関係1,308点、風俗関係315点、雑73点、植物標本2,091点の合計3,787点で、うち1,991点が陳列されていました。紀念館設立に心血を注いだのが、表紙で胸像の写真を紹介した梓川北条出身で明治34年(1901)から大正11年(1922)まで松本小学校長を務めた三村寿八郎校長です。もちろん三村



三村寿八郎

一人の力だけではなく 部下の教員たちも協力 しましたが、彼のリー ダーシップがあったか らこそ、といわれてい ます。

この紀念館は小学校 の児童ばかりでなく、 日を限り町民(市民) にも公開され県内外か らも視察が相次ぐなど、 社会教育の一部を補完することになりました。明治期、郷土に目を向けた博物館が設立され現在まで活動している事例は地方都市では極めてまれです。松本の博物館設立は日本博物館史上の草創期にあたり、三村の教育に対する熱い情熱を感じます。このように、100年前の松本では学校が博物館だったのです。この学校の博物館は、勉強する子どもや観覧に来る市民で大いに賑わい、松本の誇りとして愛されてきました。

下の絵葉書を見てください。昭和初年の制作と思われ、左はタイトルにある松本記(紀)念館(現松本市立博物館)、正面は当時の松本尋常高等小学校(開智部)です。松本は学都と呼ばれていますが、先人たちが学びを近代的な都市づくりの基軸にすえようとした学都・松本を象徴する二つの施設一社会教育の拠点、学校教育の中心校一が写し出されています。



この間、当時の卒業生が母校に寄附して供覧された学校の「たから」は、全部ではありませんが、松本市立博物館で「市民のたから」になっています。今回の特別展では、松本市立博物館が学校の一部であった姿も紹介します。

3 博物館で開かれる 「学校のたから百景」

今回、博物館で「学校のたから」の展示をするにあたり、博物館らしい切り口、博物館だからこその展示にしたいと考え、テーマを練りました。まず前提としたのが、博物館はどんな分野の資料でも展示対象になるということです。むしろ、世間一般で「たから」=美術工芸品という図式ではなく、地域に根ざした博物館・学校の「たから」を多く市民に知って欲しい、という図式です。

もちろん学校には素晴らしい美術工芸品がたくさ んあります。こうした美術工芸品は、子どもたちの 感性を養うのに大きな役割を果たしますし、まぎれもない学校のたからです。しかし、美術工芸品のみの展示ならば、何も博物館で特別展として開催する意味はありません。美術工芸品も紹介しつつ、博物館らしい展示にするためには、他のテーマをもった展示品も必要になると考えました。

その一つが、教育現場としての学校のたからというテーマです。学校は当然のことながら教育機関です。子どもに勉強や様々なことを教えることが学校の一番の役割です。過去の授業で使われていた古い教育用材や古い時代の地図や古文書などは、教育機関としての学校の性格を表す貴重な資料といえます。

また、地域の拠点という性格も、学校の重要な側面です。学校に保管されているものを見ると、民芸品や農耕用具といったものが多く残っています。かつては、学校の先生は子どもたちへの教育と同時に、地域の大人たちにも知識や技術を伝えることをしていました。学校は地域の拠点としても歩んできた経緯があります。地域の人や卒業生、関係者にとっても学校は特別なものであったのでしょう。そうした人たちが学校へ寄附されたものも、学校には大切に保管されています。いろいろな人々の思いを受け取ってきた学校、そうした側面を寄附された資料を展示することによって紹介していきたいと考えています。

もう一つは、生徒にとっての学校のたからといったテーマを設けたいと思っています。子どもたちの成長の場である学校は、子どものころの楽しい思い出がいっぱい詰まっています。学校を思い出すとき浮かんでくるもの、みんなで歌った校歌や学校のシンボルになっていたものなど、見る人に楽しかった学校時代を感じていただけるような展示を行いたいと考えています。もちろん、学校に残る美術工芸品の紹介も行いますし、他にも学校に残る写真展のようなことも考えています。

以上のようなテーマを考えながら、美術的価値、 金銭的価値にとらわれずに、博物館らしい視点から 「学校のたから百景」展の準備を進めています。

4たからにはどんなものがあるの?

(1) 埴原学校絵図

中山小学校に所蔵されている絵図です。作者は、享和元年(1801)に埴原村(現中山)で生まれた仙石翠淵です。翠淵は、幼少の頃から絵を好んでいたようで、ほぼ独学で絵を学んだといわれています。(翠淵が49歳の時、安藤碧鳳に学んだ程度)人物の描写にすぐれ、透視図法・遠近法を取り入れた風俗画を開拓した、明治期の松本を代表する画家の一人です。

右の絵図 は、名前のと おり埴原学校 を描いたもの で、明治15年 (1882)の作 品です。明治 6年に設立さ れた埴原学 校(元は日新 学校という名 で、明治8年 に埴原学校 に改称)です が、折からの 校舍增改築 ブームに乗り、 明治8年から



中山小学校「埔原学校絵図|

新校舎の建設に着工します。そして、3年経った明治 11年に、白亜の漆喰壁がまぶしい洋風2階建ての新校舎が落成しました。校舎の中央に風見柱をつけた 方形の太鼓櫓がそびえる堂々たる洋風建築は、当時 の人たちに文明開化を強く印象づけたことでしょう。

建築費や棟梁の名前など、もう分からなくなって しまったことも多いのですが、この絵図のおかげで 新築当初の校舎の建築様式や外観などがわかります。 また、校舎の周りに描かれた人々から当時の生活の 様子もうかがい知ることができ、美術的価値はもち ろんですが、歴史的資料としても非常に貴重な絵画 といえるでしょう。

(2) スタインウェイのピアノ

梓川小学校の音楽室にあるスタインウェイ(ドイツ製)のグランドピアノです。今から85年前、事業で成功を収めた旧倭村出身者13名から寄附されたもので今でも現役として使われています。現在のものと比べるとかなり小ぶりな姿ですが、それに負けない素晴らしい音色を響かせています。85年間変



梓川小学校「スタインウェイ ピアノ」

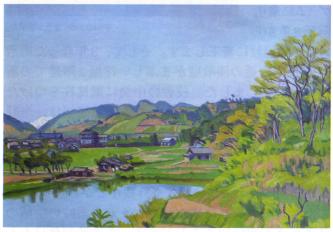
(3) 石井柏亭絵画

本郷小学校には石井柏亭の絵画が飾られています。 「真観寺新緑」と「本郷小学校遠望」といった作品 があります。

作者の石井柏亭は、明治15年(1882)、日本画家・ 石井鼎湖の長男として東京に生を受けました。

祖父が谷文晁の門下であった鈴木鵞湖、弟は彫刻家の石井鶴三という、芸術一家でした。柏亭も、父から日本画を、浅井忠から油彩画を習い、中央画壇で活躍していました。戦災のため、昭和20年に浅間温泉へ疎開してくると、そのまま信州にとどまり、晩年は、信州美術会の会長を務めるなど後進の指導に全力を尽くしました。

現在、彼の作品の多くは松本市立博物館を経て松本市美術館に収蔵されていますが、学校でも大切に保存され、子どもたちの教育に役立っています。



本郷小学校「真観寺新緑」

(4) 地域の人々からの寄附

平成9年に、松本市立博物館では市内小学校の所蔵資料調査を行いました。その調査結果を見ると、農耕用具などの民俗資料や民芸品などの多さに驚かされます。脱穀機や千馬扱き、万能などかなりの数の農耕用具が調査されていますし、みすず細工や七夕人形、押絵雛といったものが所蔵されていたことがわかります。なかでも興味が引かれるのは、足袋屋の看板や菓子箱が保管されていることです。当時の生活を知ることができる貴重な資料といえます。

その他にも生活用品など多種多様なものが寄附されており、学校が地域の人々にとって大事な存在であったことが伺えます。地域の拠点としての学校のたからというテーマで、こうした学校の姿を紹介していきたいと考えています。

(5) 子どもに叩き継がれてきた大太鼓

鎌田小学校の音楽室には、大きな太鼓が鎮座しています。胴の長さが約85センチ、皮の直径も約65センチという大きな太鼓で、大人4人はいないと運



鎌田小学校「太鼓」

べないというほどです。この太鼓は、現在も音楽会 などで子どもたちに叩かれる現役の太鼓です。

太鼓自体はなかなか古いもので、昭和20年代からあったといわれています。(昭和27年の校舎配置図に"たいこ"の記載が見えます)由来などは不明だったのですが、鎌田小学校が行った調査により、太鼓の内部に「昭和二十年六月、南新町井野根太鼓店、製作」と記載されていることがわかりました。また、戦時中に金属類の供出で時を告げる鐘が出されてしまい、その代わりに校舎の天井から吊るし、時を告げていたということもわかってきました。おそらく、鐘が無くなった後に、鐘の代わりとして太鼓が所蔵されるようになったと考えられています。

製作から40余年が過ぎた平成11年に、同窓会やPTAの方々が中心となり、太鼓の皮の張替えや修復を行いました。皮の張替えを行ったのは、御諏訪太鼓で有名な故小口大八さんでした。

歴代の児童たちから愛され、叩き継がれてきた 太鼓も、すっかりきれいな姿になって、これからも 鎌田小学校の子ども達に力強い音を聞かせていって くれることでしょう。そんな鎌田小学校の歴史とと もに歩んできた太鼓も、鎌田小学校のたからといえ るのではないかと思います。

(6) 青い目をした人形

筑摩小学校と本郷小学校には、約80年前に誕生した青い目をした人形が残っています。筑摩小学校が「メイプル」(平成16年命名。もともとの名称は不明)ちゃん、本郷小学校が「メアリーロー」ちゃんという名前で、どちらもアメリカ生まれの人形です。旧開智学校にも「ジェーン」ちゃんの人形が展示されているので、そちらで見た方もいるかもしれません。明治生まれのこの人形たちは、その小さな体には不釣合いなほどの深い歴史を背負っています。

明治以降、日本国内の生活苦を逃れるため、日本からアメリカへ移民する人が急増しますが、自らの 仕事が減ってしまうと恐れたアメリカ人労働者には

歓迎されませんでした。日本人移民の締め出しが始 まるなど、不穏な空気が流れていた当時、日米親善 に動き出した人がいました。その人の名は、シドニー・ L・ギューリック、宣教師をしていた人です。ギュー リックは、日本のひな祭りの習慣を参考に、人形を 通じての日米親善を目指しました。そしてその考え に賛同する人が徐々に増えていき、昭和2年(1927) には、アメリカ各地の子どもたちから集められた人 形が日本の小学校・幼稚園に贈られました。彼らは、 一つ一つの人形に手作りの服を着せ、名前をつけて いました。その中で、松本に来たのが「メイプル」、 「メアリーロー」、「ジェーン」と名づけられた人形 たちでした。人形には、「この人形をひな祭りに参 加させてほしい」というギューリックからの手紙が 持たされていたため、松本では月遅れの4月に雛人 形と一緒に飾られたそうです。

その後、太平洋戦争が始まると、日米親善の象徴であった人形たちは大部分が処分されてしまいました。筑摩小学校に残るメイプルちゃんと本郷小学校のメアリーローちゃんは、県内に27体残ったといわれる人形の2体なのです。

日米親善という重責を果たしながら、戦争によって 大部分が処分されてしまうという悲劇をくぐり抜け、 メイプルちゃんとメアリーローちゃんは現在も大切 に保管されています。

(7) ももたろう―いのちをつなぐ―

並柳小学校で暮らしていた、「ももたろう」という名前のクジャクの剥製です。

「ももたろう」は開校2年目の昭和59年(1984)から並柳小学校で飼われ始め、代々6年生の子どもたちが面倒を見ていたということです。残念ながら平成16年(2004)に永い眠りについてしまいましたが、



21年もの長い

日々を並柳小

学校の子ども たちと過ごし

てきました。

その後、学校

並柳小学校「ももたろうの剥製」

ていただいた時に、学校の先生から、「これこそ 学校のたからです!」と力強い言葉をいただき ました。

これから先もずっと、「ももたろう」は並柳小学校の子どもたちの成長を見守っていくことでしょう。

5 学校の「たから」を守るために 一学校郷土博物館の試み―

さて、誌上「学校のたから百景」はいかがだったでしょうか。今回ご紹介したたからはほんの一部であり、学校にはまだまだたくさんのたからものが保管されています。

学校のたからをめぐる環境は学校によって様々です。かつて多くの小学校には郷土資料室があり、学校のたからが保管されていました。昭和30年代から40年代にかけて私が通学した市立T小学校にも郷土資料室があり、記憶が定かではありませんが、糸車や農具、古文書、考古資料などがありました。

しかし、郷土資料室がなくなってしまった学校もあれば、現在も郷土資料室が活用されている学校もあります。各学校の詳しい現状はわかりませんが、管理や展示で苦労している学校もあると聞いています。

学校のたからは、文字通り学校の、地域のみんなのたからものです。これらのたからものは後世に伝えていく必要があります。また、たからものであるからこそ多くのみなさんに知ってほしいとも考えています。そこで博物館では、今回の特別展に、学校郷土博物館の試みという思いも込めています。少し飛躍しますが、後世に伝えるべきモノであり、広く供覧するべきモノを持つということは、博物館と共通しているといえます。各学校は○○小・中学校郷土博物館とは考えられないでしょうか?

もちろん学校の観点からすると、学校への関係者 以外の出入りは望ましくありません。しかし、博物 館という観点からすると広く公開することが望まし いという課題もあります。そこで、開校記念日、 PTA総会など、一定の日に学校博物館としてたか らものを開放し、多くの方に接していただくという 取り組みから始めていければと考えています。

歴史をひも解くと、松本の学校は博物館でもありました。今、各学校に学校郷土博物館を広げていくことができれば、松本まるごと博物館構想の推進という面からも素晴らしいことですし、学校のたからを守り伝えていくという命題も果たしていけることと思います。

(館長補佐/窪田雅之、学芸員/遠藤正教)

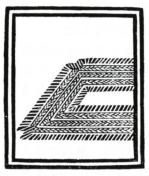
※今回、ご紹介した学校のたからは、それぞれの学校が持っているたからの紹介であり、「学校のたから百景」では展示されない場合もあります。

工芸の五月 アーカイブズ

善光寺道名所図会の記述「牛馬の荷物一日に千駄つけ入りて、又千駄つけ送る」のとおり、江戸時代の松本は物流で賑わいをみせる町であると同時に、匠たちが軒を連ねる「ものづくり」の町でもありました。また、戦後には「民藝運動」も盛んにおこなわれました。

「工芸の五月」は松本の「ものづくり」を礎として開催されています。本年度、博物館では連携企画として、期間中に3つの展覧会を開催しました。ここでは、各展覧会の担当者の言葉とともに工芸に染まった5月の松本を振り返るものです。

「松本の美―みすず細工―」



※柳宗悦·著『手仕事の日本』挿絵より 信濃松本 美篶炉縁(みすずろべり)

松本市立博物館の企画展は、 みすず細工の最後の現役職 人といわれ、昨年2月に亡 くなられた中澤今朝源氏の ご遺族の方から50点余りを 寄贈いただいたことにより、 開催することが出来ました。 また宮澤功氏の展示協力を いただき、より充実した内 容となりました。

みすず細工とは、すず竹を材料に編まれた日常使いの竹細工のことです。すず竹はえんぴつ程の太さのもので、それを 6、8等分に割って材料とするため、出来上がった製品はとてもしなやかで、なめらかです。松本でいつから作られていたのかは確かではありませんが、『善光寺道名所図会』にも載っており、江戸時代の末期にはすでに松本の特産品として広く認識され、明治を迎えると海外にも出荷されていたほどです。しかし、現在このみすず細工を日常生活の中でみかけることは、ごくまれになってしまいました。

この企画展では、まず多くの方にみすず細工を知って貰うために、行李やざるなどの日用品や農作業用品



すず竹のなめらかさが活かされた繭箕、魚びく

を中心に、みすず細工の繊細さを活かした手提げカバンなど多岐に及ぶ作品を展示しました。懐かしいと感じる方、聞いたことがないと思う方、実際にモノを目にして「このことだったのか」と気づく方、様々な方の反応がありました。

みすず細工が日用品である以上、現代の生活様式にあった代替品にかわってしまったのは、仕方のないことだったのかもしれません。しかし、手作りでしか出せない使い心地の良さ、使い込むことで出る味わいは、なにものにも替えがたいものもあるでしょう。この先みすず細工を残していくには、製作に適したすず竹を伐採できる土地をはぐくみ職人を育てていく、それなりの年月と根気が必要となります。

今回の展示では多くの反省点もありましたが、 博物館という場で、それらのことを伝えていくこと ができる第一歩として活かしていきたいと思います。



(学芸員/西村奈美)

「柚木沙弥郎展」

平成22年4月24日(土)から5月30日(日)まで、旧制高等学校記念館ギャラリーにおいて企画展「柚木沙弥郎展」を開催しました。

なぜ、この時期に旧制高等学校記念館で染色工芸作家・柚木沙弥郎氏の展覧会なのでしょうか。それには2つの理由があります。ひとつは柚木氏が、旧松本高等学校を卒業しており、旧制高校にゆかりがあることです。もうひとつは、同時期に松本で毎年恒例となっている工芸のイベント「工芸の五月」が開催されるためです。この時期に当館で旧松本高等学校出身である工芸作家柚木氏の展覧会をおこなうに最もふさわしいと考えました。

柚木氏は大正11年(1922)東京の田端に生まれました。父は洋画家で、祖父も文人画家として名をなした人物である芸術一家に育ちました。また、当時、美術人や作家が多く往来した田端という文化的

風土の中に青春時代を送ったことも、芸術家として の氏を形成する要素となったようです。

昭和15年(1940)には、旧松本高等学校に入学、山と自然に囲まれた学び舎に学んだのち、昭和17年に美術史を学ぶために東京大学文学部美学美術史学科に進学しました。しかし、時代は戦争一色、勉学は戦争で中断されて、復員後の昭和21年からは父祖の郷里である岡山県の大原美術館に勤務します。

ここで和紙に大胆な民芸模様を型染めした暦に出会ったことがきっかけで、氏は民芸のとりこになり、昭和22年、大学での研究と仕事を捨てて、この暦をデザインした芹沢銈介に弟子入りします。そして芹沢の薦めで紺屋に住み込み、型から染めまでの染色技法を学びました。以来、型染めによる作品を中心に、絵はがき、版画、イラストレーション、装幀、絵本の挿絵など幅広い仕事に取り組み、その独特な作風は多くの人を楽しませてくれます。

今回の企画展準備の過程で、柚木氏にお会いする機会に恵まれましたが、現在87歳の氏は今も世界で活躍する実に若々しい方でした。お話を伺うなかで、60歳程も年の離れた私も大いに刺激とエネルギーをいただきました。そこに年齢の壁を感じることは全くなく、親しみを覚えるほどでした。このあふれるエネルギーや親しみやすさは、今回展示した作品にもにじみ出ていて、氏の作品には見る者の足をふと止めてしまう不思議な魅力があるように感じました。まさにこの人物にしてこの作品ありという印象を受けました。常に新しい仕事に取り組まれる氏は今年パリで3度目となる展覧会を開催する予定です。今後も柚木氏の活躍からはますます目が離せなくなりそうです。



(旧制高等学校記念館 学芸員/高山直樹)

「生活を着る 刺子展」

松本民芸館の収蔵品の中で、「刺子」はもっとも 人気のあるものの一つです。民芸館創設者、初代館 長丸山太郎のもっとも愛するものの一つも「刺子」 でした。それは丸山太郎が幼少のころ、両親から「使



えなくなってもう一年」という言葉をよく聞かされていて、人様が作ってくださったものを大切に使いなさいと教えられてきたからでしょう。「私はあの青森の「こぎん」や「南部の菱刺」を見るたびに、気の遠くなるような根のいる仕事に胸が熱くなる。」「野良に着ていくものにさえ、かくも美しく心をこめて刺したものか…(後略)」(丸山太郎「刺子のいろいろ」『民藝』昭和50年6月号)とその美を称えています。

今回は、約50点の刺子を展示しました。刺し方が分かるように裏地を見せて展示したところ、刺子をされる来館者に大変好評でした。入口すぐの玄関ホールに衣こうにかけてそのまま見られるようにした三国の着物は、「刺子展」として来館者に強い印象を与える効果があったようです。使い古され穴が開いた荷ずりや漁師自ら刺したといわれている仕事着、裏の艶やかな模様に江戸っ子の心意気を感じる火消し刺子、願いの込もった意匠が施された風呂敷の数々は、「こまかくデザインしていて、すごいなあ~と思った。(小学校3年生/民芸館感想ノートより)」と来館者に様々な思いを抱かせた展示になりました。

東もと富に方子ら数時方ったし京ち、山静か展れりににてらまぶる福、県岡らをるま、もいとたりました井大とこ見方し地った再。 めい 県阪、のにも た元とだ認



三国の着物

(松本民芸館/小池史子)

松本市立博物館から

20263-32-0133

七夕企画展 「まつもとの七夕 2010」

星と人形へ願いを~七夕と盆~を開催します。

会 期 7月31日(土)~8月22日(日)

会 場 市立博物館 展示室

観覧料 通常観覧料(大人200円、小人100円)



なお、今年も8月1日(土)から10日(月)まで市立博物館周辺の商店街、町会などと協働でまちなか展示「七夕人形ロード」を開きます。まちなかでもステキな七夕と出会ってください。

重文旧開智学校から

☎0263-32-5725

特別展「なつかしき謄写版の世界」

学校現場でつい最近まで使われていた謄写版を紹介します。

会 期 7月27日(火)~10月31日(日)

会 場 旧開智学校校舎特別展示室

観覧料 通常観覧料(大人300円、小人150円)

考古博物館から

20263-86-4710

第32回あがたの森考古学ゼミナール 時を刻む、時間を計る~発掘された時間(全2回)

第1講 「時を刻む~発掘された古代の時間」

日 時 7月17日(土) 午後1時30分~3時

講 師 木下 正史氏(東京学芸大学 特任教授)

第2講 「時間を計る~考古学から見た時間」

日 時 7月24日(土) 午後1時30分~3時

講 師 川崎 保氏(長野県埋蔵文化財センター 調査研究員)

会 場 あがたの森文化会館 2-8教室

定 員 各回60名程度

申 込 7月3日(土)事前電話受付 当日受付有

申込・問合せ先

電話で考古博物館まで

旧制高等学校記念館から

☎0263-35-6226

特別展「旅順工科大学開学100周年記念展 |

会 期 7月17日(土)~9月5日(日)

会 場 旧制高等学校記念館ギャラリー

観覧料 無料(特別展のみ)

時計博物館から

20263-36-0969

長野技能五輪・アビリンピック2012応援事業 特別展「掛時計づくりの軌跡~輪入から国産へ~|

日本の掛時計の機械構造の変遷

会 期 7月31日(土)~9月5日(日)

会 場 時計博物館3階企画展示室

観覧料 特別展は無料(ただし常設展は有料)

窪田空穂記念館から

20263-48-3440

空穂生家子ども教室

教室名	開催日	時間	指導者	対象者
空穂生家 囲碁教室	7月28日(水) ~30日(金)	午前10時~正午	地元指導者	小中学生
空穂生家 将棋教室 7月 7月	7月10日(土)	午前10時 ~午後4時	石川陽生七段他	午前:小中学生 午後:小中学生·大人
	7月3日(土) 7月31日(土) 8月1日(日)	午後1時30分~4時	地元指導者	小中学生
空穂生家 折り紙教室	7月17日(土) 8月10日(火)	午前10時~正午	窪田空穂記念館	小中学生

会 場 窪田空穂生家

参加料 無 料

申 込 各教室の実施当日までに電話で窪田空穂記念 館まで

重文馬場家住宅から

20263-85-5070

お茶席の会

日 時 第4回/7月18日(日) 午前10時~正午 おしゃれ茶道の会(裏千家)

第5回/8月29日(日) 午前10時~正午 松風の会(表千家)

参加料 通常観覧料(大人個人300円、中学生以下無料)

七夕人形作り講座

誰でも簡単に七夕人形が製作できるキットを使って七夕 人形を手作りしてみませんか。

日 時 7月24日(土) 午後1時30分~午後3時

参加料 1.000円(材料代)及び入館料

申 込 電話で馬場家住宅まで

松本民芸館から

☎0263-33-1569

企画展「山里の民芸 ざる・かご展」

山里の竹、蔓、藁、木、草、木の皮などの原材料を用いて編まれ、組まれて生活に馴染み使われてきた編組品の数々を展示します。

会 期 7月13日(火)~9月5日(日)

観覧料 通常観覧料(大人300円、中学生以下無料)

侃侃諤諤! 喧喧諤諤? いえいえ、「勧館学楽」です!

みなさんのご参加をお待ちしています ●

第4回学都松本・博物館「勧館学楽」対談は

対談者 村上さよ子さん(自然観察指導員・市民学芸員) 小原 稔(山と自然博物館学芸員)

『里山で遊ぶ・里山で学ぶ―アルプス公園の活動から』がテーマです フ月17日(土) 午前10時30分~正午 [会場] 松本市立博物館講堂

あとがき

「勧館学楽対談」(かんかんがくがくたいだん)は、月1回開催しているいろいろなテーマで市民と学芸員が対談する企画です。市民とともに未来の博物館づくりを目指す「先見の明」になりうるようにとの願いからはじまりました。 (O.K)

あなたと博物館 No.169

発行年月日/平成22年7月1日 編集·発行/松本市立博物館

〒390-0873 松本市丸の内4番1号 Tel.0263-32-0133 URL:http://www.matsu-haku.com e-mail:mcmuse@city.matsumoto.nagano.jp 印刷 川越印刷株式会社